

### 附属中学校

## 附属中学校の研究について

### (1) 主題設定について

附属中学校では、2019年度の研究主題として、「学ぶ力を育む『やりくり』授業の開発」としています。これまでの研究実践で培ってきた「やりくり」をさせる授業の在り方について、具体的な方法と意味について深めていくことを目的としています。

「学ぶ力」とは、未知の問題に対する振る舞いを選択する力であり、自ら問題解決に取り組もうとする意欲や態度であると捉えています。また、授業で学習したことが授業内で終結するのではなく、家庭生活や社会生活の諸場面において、類似した思考として引き出され、活用できるような力として獲得できることを指しています。鳥取大学附属学校部4校園（幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校）では「いま伸びる力とあと伸びる力を育てる」という共通テーマで研究を進めているところですが、本校では、「あと伸びる力」に大きな影響を与える力として、「学ぶ力」を捉えています。学習内容が教室を飛び出してこそ、活用される力になるし、自分を大きく羽ばたかせる力としての素地を作ると考えているのです。そのためには、授業で提示された問題を解ければよいのではなく、問題に含まれた概念や問題の意図する文脈、問題に対峙する意欲や好奇心など、問題自身や問題を解決する過程にある、さまざまな考え方や意識を包含し、既存の知識や経験を巻き込んでいくことが重要であると考えています。そして、授業での学びを完結したものとして捉えさせずに、動的な概念形成過程の一部であると捉えさせることが、今後も学び続ける個人としての自覚を促すことができると考えています。

「やりくり」という言葉は、問題解決場面での思考に関する実践イメージとして捉えているものです。このイメージについては、内田(2009)<sup>i</sup>の知見より

インスピレーションを得ています。内田は「学びという営みは、それを学ぶことの意味や実用性についてまだ知らない状態で、それにもかかわらず、これを学ぶことがいざし生き延びるうえで死活的に重要な役割を果たすことがあるだろうと先駆的に確信することから始まる」と述べています。つまり、学ぶということは、始めた時点では意味が理解できていなくても、いずれ重要な意味をもつことが確信できる、言い換えれば、学びは事後に重要となることが予見できることから始まるのだという



ことです。そして、そのような力を育むためには、「やりくり」を常態化させることが重要であると指摘しています。学びに、この様式を取り入れることが、本校の「やりくり」といえます。自分の持っている経験や知識を動員して問題解決していくこと、それを新たな知識や経験として構成することを「やりくり」と定義し、授業において常態化することで、生徒は学びの中に、いずれ訪れる有用性を見つけだすことができるのではないかと考えています。加えて、学んだ時点で意味がよくわからないことでも、いつか理解できるためのストックとして蓄えることができるとも考えています。

「やりくり」授業は、これまでも本校で積み重ねてきています。例えば技術の授業における製図の「やりくり」授業を紹介します。写真は、木材加工における製図についての「やりくり」授業の一場面です。製図に関して、生徒は接合部分の板の組み合わせについて意識が薄く、板の厚みを考慮した製図が困難であるという問題がありました。ここに「やりくり」を導入しました。まず完成された簡単な製品を提示し、正確に情報を記すよう指示します。ここが生徒の「やりくり」です。「正確に」とは指示しますが、具体的にどのようなことを記すかは指示しないので、生徒は各自必要と考える情報を記していきます。次に提示した製品を隠し、製品の部品（ダミーの板を含む）を渡し、再現するよう指示します。ここは、生徒自身の「やりくり」の評価場面です。自分の記した情報をもとに再現しようとするのですが、重要な情報である接合部分の組み合わせが記されていないと再現が困難なのです。しかし、再現できないことが体験されて初めて、板の厚みを考慮した接合部分の組み合わせが重要であるということが理解できます。このように、「やりくり」授業では、生徒が自ら考え、評価し、理解を深めるという効果が期待されます。

### (2) 「やりくり」授業の開発について

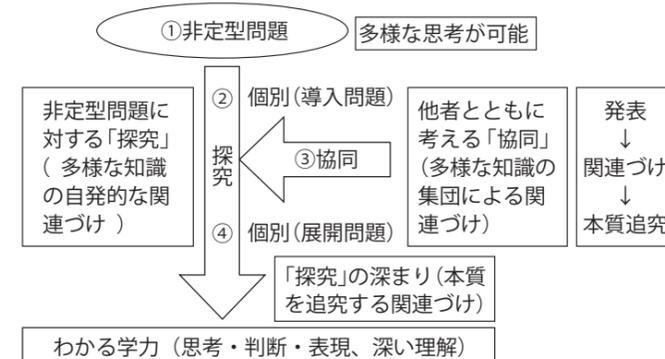


図1 協同的探究学習(協同的探究学習で育む「わかる学力」(藤村宣之)より転載)

生徒に「やりくり」させるための授業開発にあたっては、協同的探究学習(藤村(2018))の知見を借り、実践のガイドラインとしました(図1)<sup>ii</sup>。

協同的探究学習は、①非定型問題を設定すること、②個別探究場面により思考させること、③協同探究により思考の関連づけと内容理解を促すこと、④協同探究による学びを自己の概念理解にすること、の4点を特徴としています。このような枠組みに加え、具体的な題材や思考させる内容について、教師の経験的なカ

ンも頼りにして、授業開発を行っています。本校では、このように、「やりくり」させる授業を開発、検討し、学びに対する能動的な態度や思考の多様性、文脈を超えた学習内容の適用に対する効果を検証する実践研究を行っていきたくと考えています。

実践研究については、学ぶ子どもがおかれている背景、学びの空間における文脈などの理由から、得られた結果の再現が困難であることが多いといわれます。この点に関して本郷(2018)は、学習場面における支援の適切性について、短期間の実践研究によって、再現可能な支援について確定的に論じることが困難であると指摘しています<sup>iii</sup>。そして、日々の授業において継続的に研究視点をもった実践を行い、効果を検証していくことで、次第に適切性を明らかにしていくことが可能になること示唆しています。本校における「やりくり」授業の実践から得られる効果は、まだ、途上といえます。今後、継続して「やりくり」というキーワードで授業開発し、研究的視点を持つことで、次第に学校の現場感覚を含めた、効果的な支援の在り方の輪郭を捉えていけると考えています。

i 内田樹:「日本辺境論」, 新潮社, (2009)  
ii 藤村宣之、橘春菜:「協同的探究学習で育む「わかる学力」」, ミネルヴァ書房, (2018)  
iii 本郷一夫:「実践研究の理論と方法」, 金子書房, (2018)